

## 論考

# 明治大正期における茶の湯と茶人

## ——高橋箒庵と茶室の蒐集

小山 玲子

水戸藩士の息子として生を受けた高橋義雄（一八六一—一九三七）は、丁稚奉公の少年時代から慶応義塾を経て、時事新報の新聞記者として福沢諭吉の手足となり、製糸輸出業の調査に洋行し、アメリカではワナメーカー百貨店を見、イギリスでは日本美術愛好家ボースに日本美術を教えられ、フランスでは折しも開催中のパリ万博を遊山し、帰国後は三井銀行・三越呉服店などで実業家として活躍し、五一歳で実業界を引退して隠遁、「数寄者」<sup>\*1</sup>高橋箒庵と号し、茶人として余生を送った。

日本文化・茶道史・箒庵研究で知られる熊倉功夫が『近代茶道史の研究』<sup>\*2</sup>、『近代数寄者の茶の湯』<sup>\*3</sup>において指摘したように、書くことが何よりも好きだった箒庵のライフワークは、自分の出席した茶会記の執筆<sup>\*4</sup>、『大正名器鑑』<sup>\*5</sup>の編纂、日記『万象録』<sup>\*6</sup>の執筆の三つにあるといえる。『万象録』からは、近代数寄者や政治官界の動向を見ていくことができる。また茶会記や名器鑑と関連させて見ていくことで、高橋箒庵を通して、近代美術と経済、それを繋

ぐ人々との連環関係をより深くとらえることができる。また、蒐集に熱が入った茶を「道具茶」と呼んで、茶道の世界では良い意味としてとられないということであるが、人はなぜ蒐集するのか、これら突き詰めていくことで、なぜそれを見せる場がお茶を飲む場なのか、またなぜそういった空間が必要であるのか、ということも見えてくるのではないだろうか。

茶の湯の研究、茶書は多岐に渡るが、その中でも箒庵、あるいは近代茶道史における研究は、すでにあげた『近代茶道史の研究』や、『近代数寄者の茶の湯』といった茶道史研究がある。『近代茶道史の研究』においては、茶道研究とは何か、近世、近代の数寄者の茶の湯、民芸運動を興した柳宗悦が唱えた茶道論などから今後どのような形で茶の湯と茶の湯の研究があるべきか、熊倉氏の見解が詳述されている。一方、『近代数寄者の茶の湯』においては、数寄者として箒庵の人物と、茶の湯を通して近代数寄者たちの美の世界が持つ意味を、「時代が浮き立つような、柔らかな文体」で論じている。<sup>\*7</sup>

さらに、箒庵が執筆した茶会記、編集した『大正名器鑑』などが箒庵にとっての「蒐集」(コレクション)の一つの形として見るができる。従って本論においては、箒庵が移築・建築した茶室に焦点をあてて追ってゆき、茶室が蒐集物の一つのあり方であると考察し、そこから箒庵という人物を通して、同時代の人びとの持つ精神的な身体とその構造について分析することを目的とする。また、熊倉氏が『近代茶道史の研究』の中でいうように、茶の湯の研究のタイプは三つにわけられ、<sup>\*8</sup>茶道を擁護する立場、批判する立場、茶の湯の外からの立場(茶の湯以外の分野に陥りがちだが、客観的な視点)による研究が重ねられてきた。熊倉氏は、「異人」としての存在である茶の湯の外側からの立場による研究をより重視している。これは茶の湯の「内側からの空洞化」に対する危機感によるも

のであり、内側である茶人からの相互の交流をも重視した「広い視点」から見ていくことで、茶の湯、茶人研究、そして茶の湯の精神史といったものがあるいは見えてくるのではないだろうか。

### 蒐集の系譜

箒庵の三つの仕事といわれるのが『東都茶会記』などの茶会記の執筆、『大正名器鑑』の編纂、日記『万象録』であるが、これらの執筆物はものをかき集めたという意味では箒庵のコレクションの輪の中に入る。箒庵がデザインした自宅の庭に造った茶室もまた、その輪の中に入る。茶の湯とその茶道具のコレクションという視点から、箒庵をはじめとする近代の数寄者たちの眼差しの向けられた先が窺い知れる。飽くなき蒐集熱に憑かれた数寄者たちは、それを見せる場として茶会を選んだ。そして箒庵のコレクションから切り離せないのが、茶の湯を中心とする集まりである。クシシトフ・ポミアンが十八世紀末のヨーロッパの例を挙げて社交形態を論じているように、「豊かな陳列室」においては、定期的な集まりと、そこにおけるの作品や作家についての談話が伴う。<sup>9</sup>

従って、箒庵の茶室を追う前に、蒐集、コレクションとは何かを明らかにしなければならない。ポミアンは「コレクションとは、一時的もしくは永久に経済活動の流通回路の外に保たれ、その目的のために整備された閉ざされた場所で特別の保護を受け、視線にさらされる自然物もしくは人工物の集合である」と定義した。<sup>10</sup>

では、茶の湯における蒐集、すなわちコレクションとはどのような物をさすのか。まず、モノとしてのコレクションで言えば、茶道具がそれにあたる。本来は別の用途としての機能を持つ物を、茶道具として「見立て」て使用することによって、コレクションとして自分の内側へ引き入れるのである。箒庵の同時代の先輩茶人益田孝（鈍翁・

一八四八〜一九三八）が仏像の座る台の蓮の花びらの一片を茶会の中に菓子器として用いたという一例が端的にそれを表している。<sup>\*11</sup>

蒐集・コレクションをしていく上で重要となるのが、何をコレクションしていくか、という点にある。数寄者の場合、茶会の席で披露するという前提が伴うので、これ一つだけ蒐集すれば良い、というわけには行かない。もし茶碗の蒐集がメインだとしても、茶会を催すために床の間に掛ける書画掛物に始まり、花入、茶器、茶杓、釜、懐石の器に至るまで一通り蒐集していなければならぬ。茶碗を見せるためであるなら、茶碗に合うような道具を選び、智慧に富んだ趣向でなければ数寄者とは言えない。ところで、コレクションされたものは、ポミアンによると「実用的な目的を持たない芸術作品と同等に扱われる」<sup>\*12</sup>存在となるというが、茶室においては、いったんコレクションされたものが茶道具として、茶を飲む道具として使用される。クリステイヌ・ガース女史は、数寄者および茶人のこの行為を「リサイクル」と表現しているが、茶室の中においてはどのような蒐集物も茶道具として見立てることが出来れば、「有用性」が付加される。

箒庵と同時代人における蒐集とそれを巡る人々の系譜、集会については、山口昌男が論じているように、さまざまなものがあり、茶会もその一つに含まれる。蒐集という観点から茶会、茶室を考えると、それらのものすべてが所有する人間とつてのコレクションと言える。例えば、茶室の内部では茶道具の「取り合わせ」という形でコレクションが成り立つ。<sup>\*13</sup>「取り合わせ」は、茶道具として蒐集したもののなかからさらに選び出した仮設的な、茶会によって毎回変わる。そこには風情、季節感はもちろんのこと亭主の見立ての趣向、センスの良さが試される。それを書き留めて残すのが、茶会記である。茶会記と茶室にはコレクションの中にコレクションを包み込む働きがある。

## 箒庵の茶室作りの事始め

箒庵ら近代の数寄者たちは蒐集した書画骨董、茶道具を披露するために、茶会という場を使い、趣向の富んだ「見せ方」をした。同じ道具を用いても、他の道具との取り合わせで何通りもの茶会を開くことができる。一つとして同じ茶会となることはない。蒐集品を茶道具として使えば使うほど、さらに蒐集熱は高まる。そして関心は道具の蒐集だけに留まらず、それらを披露する茶室、茶室に至るまでの露地・待合、あるいは床に活ける花、料理、香など、茶会全般に及んでいく。

箒庵を茶の世界に引き込んだ益田鈍翁の弟・克徳（非黙・一九五二〜一九〇三）は、茶の湯をするうちに庭に関心を持つようになり、茶室・露地の設計を手がけるようになった。克徳は、ある時、御殿山の座敷に炬を切り、茶の湯をかじっていた兄の鈍翁に「お前は美術をやるが茶はやらぬ、茶をやれ」と、茶を本格的にやるように勧め、「茶席は頭を打ってばかりいるじゃないか」という鈍翁のために「頭を打たぬ茶席」<sup>\*14</sup>幽月亭を作った。明治三十三年のことである。

箒庵もまた茶の湯の世界に没入後、いくつもの茶室の移築・建築や築庭を手がけている。益田三兄弟の末弟益田英作（紅艶・一八六五〜一九三三）、骨董美術店好古堂主人中村作次郎の「好古庵」<sup>\*15</sup>、濱町の料理屋常盤屋主人、歌舞伎俳優中村歌右衛門、箒庵の茶の湯仲間で関西の実業家藤田伝三郎の息子藤田平太郎、中山佐市など、箒庵に茶室の移築・建築、築庭を依頼した人が多いのも、彼が旺盛な研究心と益田鈍翁・非黙ら茶数寄との茶会で鍛えられた感性、書画骨董の鑑識眼と大胆さを共に持ち合わせていた人物であったからであろう。

箒庵は、茶湯においても茶室建築・築庭に於いても楽観主義者で、「おらが」主義を通した。回顧録ともいえる『箒

のあと』には「自己満足するやうな住宅を造らんとすれば、一生掛っても実現不可能であるから、私は西洋実業家の原則を逆に行き、敢て借金はせぬまでも、当座持ち合はせの財布の底を叩いて、先ず自己の趣味に相応する住宅を造り、且つ住み、且つ楽しみ、一朝維持困難と為れば、其時直に之を処分すべきのみ、と云ふ訳で、固より一般人の標準と為る可きものではなく、呑気千萬なる、箒庵一流の住宅経営法を採用した」と綴っている。<sup>\*17</sup>

では、箒庵はどのような茶室を持ったのか。『箒のあと』、『東都茶会記』、『万象録』には彼が移築・デザインした茶室が登場する。「寸松庵」、「箒庵」、「白紙庵」、「嬉森庵」、「伽藍洞一木庵」などである。ここで特に私の関心を惹いたのが「白紙庵」であった。「白紙庵」は箒庵にとってどのような存在であったのだろうか。

### 麴町一番町因縁の茶室

箒庵が持つこととなった初めての茶室が「寸松庵」であり、麴町一番町に新居を構えたと同時に邸内に移築されたのが明治三十一年のことであった。そしてこの移築の際、箒庵は克徳に住居の庭・露地の経営や寸松庵移築の指図をもらっている。披きの間は巨勢金岡紅蓮図を床に掛け紅蓮軒と名づけた。

「寸松庵」について、『近世道具移動史』<sup>\*18</sup>、『東都茶会記』、『箒のあと』<sup>\*19</sup>においてその顛末が記されている。

「明治二十八年頃に益田鈍翁が数寄者野村某からより扇面附属寸松庵色紙一枚を二百円前後にて買収せられ、日本橋区茅場町別宅にて」催した「色紙披きの茶事」に招かれた箒庵が、寸松庵色紙を拝見したことに始まる。<sup>\*20</sup> この、寸松庵色紙とは、「古来古筆家が紀貫之筆と定めた者で、同筆に高野切、家集切などと云ふのがあるが、此の色紙がもっとも傑作と居はれて居」り、古今和歌集の四季の歌を書写したもので、もとは堺の南宗寺の襖に三十六枚押さ

れていたものが初代古筆鑑定家古筆了佐の鑑定を経て烏丸光廣卿の手に渡り、後に佐久間将監がその中の十二枚を入手し、一枚ごとに歌意を描き、「色紙の歌に相当する図様の古扇面と取り合せ、色紙を上、扇面を下に張り交ぜて一帖を作り、寸松庵の什物と為したので寸松庵色紙と呼ぶに至つたのである<sup>\*21</sup>」。

「寸松庵」は、元和七年（一六二二年）佐久間将監真勝（又は実勝・一五七〇〜一六四二）によつて京都紫野大徳寺龍光院内に建てられた三畳台目の茶室である。明治十二年（一八七九年）、維持困難となつたため、寸松庵をはじめ待合、楼門、そしてそこに収められていた佐久間将監の蒐集した諸々の道具は売りに出され、ちりぢりばらばらになつた。翌十三年、京都の華族石山基文（一八二七〜一八九一）が茶室と、二畳敷の中二階式の袴付席を買い取り、東京新宿御苑の借地内の一角に移築した。次いで石山の邸宅に移り住んだ由利公正が譲り受け、その後井上馨<sup>\*22</sup>（一八三五〜一九一五）の友人子爵杉孫七郎（聴雨）の仲介で箒庵が買い取る運びとなつた。四千円と高額であつたが、寸松庵伝来の播知釜、與次郎作五徳、根来塗の寸松庵三字額も茶室に付属してくることもあり、箒庵は購入を決心した。このようにして寸松庵は箒庵の邸宅の一角に収まつた。

後日、高い買物をした箒庵に宛てて杉子爵から得意の狂歌が送られてきた。

お値段は高はし（高橋）にてもよしを（義雄）

買え袴つけたる佐久間将監

こうなつたら何が何でも、寸松庵を入手する手がかりとなつた「寸松庵色紙」を入手しよう。以来、箒庵の寸松

庵色紙への執心が始まった。

この時すでに、佐久間將監が作った扇面帖からは、色紙・扇面共に剥がされて散逸していた。箒庵は色紙を求めて、その所在が明らかになれば所蔵者のもとを尋ね交渉し、色紙の持ち主と懇意の知人には購入の仲介をしてもらうようになった。

何度も入手の失敗に合いながらも、<sup>\*23</sup>めげずに寸松庵色紙を探した箒庵が入手に成功するのは、翌年の明治三二年であった。一五〇〇円という高値で色紙を手に入れた箒庵は、めでたく「寸松庵」開きの茶会を催す。床には「年ふれはよはひはおいぬしかはあれと」の春の句を、釜は寸松庵に付属して買い取られた播知釜を用いた。客は東久世通禧（世竹亭）、松浦詮（心月）、三井八郎次郎（松籟）、三井高保（華精）、石黒忠（況翁）、益田孝（鈍翁）、赤星弥之助、安田善次郎（松翁）、馬越恭平（化生）など先輩茶人を招き、箒庵の寸松庵開き茶会は大評判となったという。この茶会をきっかけとして和敬会という順番茶会を行う会の十六人限定のメンバーに箒庵の名が加えられる事となった。

### 箒庵の「箒庵」

次に、数年後に麴町一番町の敷地内に建てられた「箒庵」であるが、箒庵の雅号の由来ともなった茶室「箒庵」は、寸松庵の三畳台目より狭い、三畳敷きの侘び茶席で、一千坪の敷地の西南の一角に建てられた。<sup>\*24</sup>

藤村庸軒好みの淀川の景色を臨める「淀みの席」を模して、庭には「大体―原箒川の景色を写し、奈良の古石、若くは筑波山の山石を寄せ集めて、大石の間より一条の瀧を落し、京都より取寄せた台杉を以て、其半面を倣ひ、



木の間がくれにチラチラと、水流を見せる趣向<sup>\*25</sup>にし、茶室の庵号に箒川から名を取り、箒川庵とつけようと思うが、箒川庵では面白みが無い。収まりが悪い。どうせなら川を取ってしまい、箒庵にしよう。このようにして生まれた茶室名がまた、高橋義雄の雅号となった<sup>\*26</sup>。「箒庵」に因んで、与謝蕪村の「箒の讚」、大口隆正の箒の讚「そのままにうちすてておかば掃ふべき箒にもなほ塵やかからん」を所蔵した。また、この時期、山県有朋主催の歌会「常盤会」に参加した箒庵は、箒という題目で参加者に歌を詠んでもらっている。主催者の山県自作の句「たまさかに朝きよめする乙女子がもてる箒のおもげなるかな」が投票で満点になったので、山県は、会場となっていた目白椿山荘の自宅の廊下に飛び出して子供のように嬉々として夫人に報告したという<sup>\*27</sup>。箒庵はこの題目で「散る花も紅葉もはきて春秋のあはれを知るは箒なりけり」と詠んだ。この「箒庵」は「寸松庵」と共に後に中井新右衛門に譲ったが、関東大震災の際失われている。

#### 「白紙庵」開席

「寸松庵」の移築と克徳のプロデュースの露地、京都の「淀見の席」を模した「箒庵」の建築などを経て、茶室・露地のノウハウを会得した箒庵は、茶室のデザインを自分で手がけるようになっていく。

箒庵が「紙」に関心が深かったことは、先に述べた最初の茶室「寸松庵」の寸松庵色紙の顛末で明らかであるが、「白紙庵」もまた箒庵の「紙」数寄が昂じて生まれた茶室であった。

箒庵がこの「白紙庵」の構想が思いついたのは、いつ頃であろうか。

茶室「白紙庵」は、箒庵が自身でデザインしたもので、明治四五年実業界から身を引いた箒庵は、麴町区一番町

の住居から、四谷区傳馬町の公園のそばという、最上の立地条件の土地に転居している。

四谷区傳馬町への箒庵の転居は自分の区切り、第二の人生というべき趣味・文筆活動へ身を投じる覚悟の表れといえるだろう。それゆえに、傳馬町邸・茶室の建築、築庭は人任せにせず、箒庵自身が細やかに指図・検分を行っている。

明治四五年七月十四日「午後四谷傳馬町の新宅地を検分せり。<sup>\*28</sup>」

『万象録』の中に傳馬町及び白紙庵の建築に関する記述が現れる。

七月三十一日に年号が大正元年と変わり、同年九月四日「午後清水組の抜手中村某、四谷新宅地に建設すべき土蔵の図案を携へ来る。近来流行する鉄筋コンクリート建築にて三階建一坪四〇〇円なる由、本来此鉄筋コンクリート土蔵は、一は廉価なる事、一は湿気を防ぐこと、此二つが特色なれば成るべく簡便にして費用を省くに非ざれば其流行を広くすること能はざるべし<sup>\*29</sup>」

次に傳馬町邸の記述が表れるのは、明けて大正二年二月一日。傳馬町隣家の出火についてで、幸い飛火は免れた。

続いて二月一七日「午後四谷普請場に赴き十五日以来棟上中の新築を検分し、また松本亀吉を招ぎて右玄関前にある松樹移植の位置を指図せり。<sup>\*30</sup>」

この植木屋松本亀吉が一貫して箒庵の手足となつて、傳馬町邸・白紙庵建築以後も築庭の材木や庭石の確保に奈良へ京都へと奔走する。三月から庭園築造に着手し、箒庵は樹木移植の時期を逃さないために、庭木探しにとりかかった。探索と購入にあたったのは松本亀吉であったが、箒庵自身も人任せにせず、木の一本一本、石の一つに至るまで、念入りに選んでいる。築庭と茶室が完成するまでの『万象録』内の傳馬町の邸宅に関する記述として、石

燈籠、筑波山から持ってきた大石、飛石、奈良法隆寺の今村文吉から庭石類を見立てて、購入した蹲踞石、飛捨石を配置し、また植付が終った田端の椎の木、京都の台杉が緑の枝を広げ、庭に趣を添えた。また、箒庵の築庭、茶室作り、茶会の準備に欠かせないのが、八田円斎、田中親美、池田慶次郎、越沢太助といった、茶の湯を知るその道に通じた人びとであった。

邸内の建具に関しては、建具師建彦、経師屋今井らに、杉戸の図案の制作は八木岡春山<sup>\*31</sup>に、倉庫内本箱、道具棚、西洋館の装飾を三越呉服店の田中忠三郎、小林幸平に依頼した。工事は順調に進み、八月中には茶室を除く外観が完成し、杉戸、書院の棚地袋、書院天井など内装を残し、予定通り九月十七日、四谷新宅に移転する。

茶室・待合・露地は植木屋松本亀吉や茶人八田円斎に配置を任せ、裏千家加州人藤谷宗中が茶室の飾付けと白紙庵を委任し、毎週一回づつ来宅して茶室の用務と茶の湯の稽古を任せた。一二月三〇日、一年に渡った四谷傳馬町邸の建築・築庭・露地がほぼ完成に至り、いよいよ白紙庵に白紙貼付けに取り掛かる事となる。茶室を「白紙庵」、広間を傳馬町にかけて「天馬軒」と名づけた。

ところで『東都茶会記』<sup>\*32</sup>及び『箒のあと』<sup>\*33</sup>によると、「白紙庵」が名づけられた所以は、三畳台目の茶室を「白紙(古紙)を以て、庵室の床と云はず、天井と云はず、全部張り廻したる」<sup>\*34</sup>と云うところ由来しており、箒庵によれば、「偶然の思ひ付き」で、藤村庸軒の反古庵<sup>\*35</sup>、織田有楽斎の茶室如庵のように腰張りに古曆を用いたものはあるが、白紙を茶室全体に張り巡らすというのは前例のない「未曾有の新案なるやも」<sup>34</sup>しれない趣向だという。新案かどうかはともかくとして、「白紙」が箒庵の美学に、箒庵の茶の湯の捉え方に適っていたことに注目したい。

この「白紙」もまた箒庵の蒐集品であった。箒庵が引退するより十数年前、まだ実業家であったころ、京都にお

いて「角倉旧蔵」と称する「半紙大の白紙に蘭竹等の図画を漉き込みたる」三百年以上前の白紙（古紙）数枚を見つ、入手した事から箒庵の白紙の蒐集が始まった。東都の旧家所蔵の蓮根紙、「一休和尚などが使用したる」大徳寺唐紙など三〇種類以上の白紙を集めた。「同じ白紙の中にも純白あり、鼠色あり、赤みを帯びたるもの、黒気を含みたるものありて、交錯参差すれば自然に景色を生ずるを見て、之を新席に張り付けばやと思ひ付きたるが、即ち此白紙庵の来歴なり」<sup>\*36</sup>。

白紙庵貼り付けに関して、箒庵はその配置などを田中親美氏に相談している。田中親美は「有名なる西本願寺所蔵三十六歌集地紙の意匠を参酌して、或いは継ぎ、或いは累ね、山の形、雲の形など種々の景色をあらわす中にも、貴重なる白紙は、剪裁を惜しみて其儘張り付け」<sup>\*37</sup>るなど、白紙のそれぞれを生かして配置の図案を考えた。白紙の壁への貼付けは、前述の経師屋<sup>\*38</sup>今井なる人物にまかされている。

他方、白紙庵においても欠かせないのが、寸松庵の時と同様、茶会と茶室に関連する、附属となる蒐集物である。箒庵は大正二年五月一七日、松江・京都への旅行中、三浦周行（文学博士）<sup>\*39</sup>を介して、道具商福田某所持の不昧公の白紙の讚一幅を買い取っている。白紙の賛（讚）<sup>\*40</sup>とは、「絵画は描いていないが、絵があるものと想像して、その余白にあたる部分と思われるところへ、賛のみを認めたもの」<sup>\*41</sup>で、「沢庵が創めてものしたと伝へられ、其の後藤村庸軒がそれにヒントを得て試みた物、及び江雪、大心、大綱、初め庸軒の子の正員、松平不昧等の筆になるものも稀にある」<sup>\*42</sup>というものであった。

また上に挙げた白紙の賛購入の後、翌大正三年一月二八日にも不昧公白紙の讚を七五円で売り出されているという連絡が三浦周行からある。<sup>\*43</sup>箱には久須美疎安の箱書きと、上部に「題白紙」という詩が書かれており、不昧公の

白紙の讚は、「横物にて表具は白紙と白絹とを用ひ、幅の片隅に、

雪降りて人もかよはぬ道なれや

跡はかもなくおもひ消ゆらむ

と一首の歌を書き付けて、唯不昧の朱印を押したるのみ<sup>\*44</sup>であった。箒庵はこの白紙の讚について「全幅、悉く皚々たるは流石に面白き趣向なり<sup>\*45</sup>」と評している<sup>\*46</sup>。

大正二年一月三十一日には松原新之助氏より、大心和尚の白紙の讚一軸、そして松原氏の一首が添えられて贈られてくる。

箒庵は、「老境閑適御一笑あるべし<sup>\*47</sup>」と、謝辞と歌を二首贈っている。

また、漢詩を通じて親交のあった岩溪裳川には、白紙庵に一詩を題し、詩を作ってもらおうよう依頼し、岩溪は「黒子泣色と云ふことあり、人の本性は白糸の如きものなれども世間に出でて様々の色に染まるを悲むの意なり、白紙も亦白糸の如く極めて面白き材料<sup>\*48</sup>」と引き受けた。岩溪は後の茶室一木庵が作られた際にも詩を作り、箒庵に贈っている。

次に、茶室入口に飾るための白紙庵扁額であるが、寸松庵移築の際は、寸松庵扁額が附属していたのでそれを茶室に掛ければ良かったが、白紙庵は作らなければならなかった。そこで箒庵は御殿山の大師会にて禅居庵を受持った際に、渋沢栄一の紹介で知り合った徳川慶喜に、白紙庵額のために揮毛をしてもらおうと、慶喜の執事福原修を

通して依頼する。しかし、二年前から揮毛を断っているが今回は特別「一枚だけ執筆す」という返事が返ってきたので、<sup>\*49</sup> 箒庵は井上馨に白紙庵扁額の揮毛を依頼した。井上馨は「一味眞」と、「白紙庵」の文字を書いて箒庵に贈った。こうして井上の字を額に彫刻し、飾った。一枚のみという返事の徳川慶喜には、「白盡乾坤」、「白眼看他世上人」など白紙庵に係りそうな言葉を白紙庵の床の掛物用に認めて貰うこととなっていたが、筆を持つ事が出来ぬまま、大正二年の暮れに薨去されたという。<sup>\*50</sup> 後日、末女の徳川圀順公夫人から箒庵のもとに徳川慶喜の書いた二行ものが送られてきて、その中に「白」の文字が偶然にも含まれていたということで、箒庵は喜んで<sup>\*51</sup>いる。しかし表具が間に合わず、白紙庵に掛けるのは、藤村庸軒の白紙の讚に決める事となった。また、道具商池田慶次郎からは雪の下という銘の井戸脇茶碗と、瀬戸大津手茶入銘月花を、合わせて雪月花に見たて、白紙庵開きの際に使用することを考慮し、買取つてもいる。

白紙庵の席開きの茶会は、大正三年三月八日から一七日にかけて催された。『万象録』では〈白紙庵開席茶会〉、『東都茶会記』では〈自茶自賛〉として、そのときの茶会の様子が描かれている。<sup>\*52</sup> 『東都茶会記』の中で、箒庵が「自茶自賛」するように、床には木瓜の花、茶碗は赤楽という、雪の中に咲く赤い花のような見立て趣向で、白紙庵の白をより際立たせるような茶会である。箒庵は、白紙庵の道具蒐集に熱心であったが、その繊細な趣向は「白紙庵」という舞台空間に一つの情景を作り上げた。そして、この白紙庵自体が箒庵の蒐集物であり、蒐集した白紙を見せる展示会場であり、さらに茶道具その他の箒庵の蒐集品を披露する場でもあるということである。茶会の趣向と茶道具の見立て、すなわちコレクションの見せ方は、一通りではない。箒庵の茶会記を見ていくと、この席開き以降、白紙庵において四回の違う趣向の茶会が開かれた。席開きの茶会の後は再び炉の季節を迎えた大正三年十一月二三

日から八日間催した「白紙庵口切茶会」、明けて大正四年二月一六日から二一日まで催した新年茶会<sup>\*53</sup>、師走の歳暮茶会を兼ね一二月二四日から二六日の三日間でひっそりと行った益田克徳の追善のための「追福小茶会」、明けて大正五年の三月二七、二八、三〇日の益田鈍翁より贈られた鈍翁自作の竹花入を用いた「是竹茶会」などが白紙庵で催された茶会である。

次に、白紙庵席開茶会に招待された茶客の面々であるが、三月八日初日は、三井八郎次郎、加藤正義、朝吹英二、団琢磨、伊丹信太郎であったが、『万象録』によれば、九日間に渡る茶会で、四二人が茶客として出席した<sup>\*54</sup>。

正客・次客の三井八郎次郎、吉田丹左衛門、三井高保、馬越恭平、安田善次郎、青地幾次郎、竹内専之助、近藤廉平、石黒忠憲、益田孝は、和敬会会員「十六羅漢」のメンバーであり、このうち三井八郎次郎、三井高保、馬越恭平、益田孝は、箒庵の三井実業家時代からの茶の湯の先輩である。

茶会の席で、末客は道具の扱いや見識があり、茶会の手順といった茶の湯の知識を持った人が配される。彼らは茶会をスムーズに進める役割を果たす。席開きの茶会でも連日の末客は、鑑定の目付け役のような人々が配されている。特に道具の流通に関わっていた面々で、「目下東京中の道具屋にて折々釜日の催しあるは此梅沢一人あるのみ<sup>\*55</sup>」と箒庵が評する道具商の梅沢安蔵は山澄力蔵と共に道具商界の重鎮で、白紙庵における箒庵の茶会に出席を欠かしたことがなかった。古筆了任は益田紅艶の経営する道具商「多聞天」で働いており、中村作次郎は骨董店「好古堂」店主、白紙庵の貼付けに携わった田中親美は古筆鑑定模写の第一人者であり美術品、骨董の流通にも関わっていた。築地料理屋主人の栗山善四郎、常盤屋主人は、箒庵ら数寄者の行きつけの店で、しばしば会合を開いている。

白紙庵の茶会出席者に見られるように、<sup>\*56</sup>まず箒庵を囲む人びとは、慶応義塾、三井・三越を中心とする系譜であるが、鈍翁、非黙、紅艶、世外、三井八郎次郎（松籟）、加藤正義、朝吹英二（柴庵）、団琢磨（狸山）、伊丹信太郎、野崎廣太（幻庵）、三井高保（華精）、三井守之助（泰山）、有賀長文、馬越恭平（化生）、池田成彬、平田久（越々）などで、世代としては箒庵より上の人びと。また、特に箒庵とお互いの茶会を頻繁に往来し、<sup>\*57</sup>熊倉氏が「第三世代」という、世代に属する団琢磨（狸山）、根津嘉一郎（青山）、原富太郎（三溪）、藤原銀次郎（暁雲）などの箒庵と同世代の数寄者の人びと。<sup>\*58</sup>そして箒庵が道具を介する付き合いであった茶道具商、古筆家、古美術研究家、茶匠、建築家の人びと。伊丹信太郎、山澄力蔵、梅沢安蔵、古筆了仲、古筆了任、大久保北隠、下條正雄、田中親美、中村作次郎、奥村晴山、仰木魯堂、これらの人びとは数日にわたる茶会に茶客としてバランスよく組み合わされている。

一方、一四日の平岡夫婦（平岡熙）をはじめとする茶客は、箒庵とは音曲においてつながりを持つ人々であるが、平岡は箒庵の義理の父でもあった。山口昌男によると、平岡熙（一八五六〜一九三四）は、江戸っ子気質と負けず嫌いな性格、陽気でフレキシブル、悪戯好きな「トリックスター」的な人物であったという。<sup>\*59</sup>箒庵著『平岡吟舟と東明曲』<sup>\*60</sup>にもその人柄が綴られている。明治四二年、三井銀行入行以来連れ添った妻千代子に先立たれた箒庵は、翌年平岡の次女楊子を後妻に迎え、実業界を引退し、その翌年長男忠雄が生まれている。「素人揃にて椿事百出笑声満庵」<sup>\*61</sup>『万象録』におけるこの一言に、箒庵にとって平岡達との茶会や集まりが気楽であり、楽しみであったことが伝わってくる。また、『万象録』には後の茶室「伽藍洞」における「花見の一席」の様子が描かれている。



## 「白紙庵」以後の茶室

一方、「嬉森庵」は、名古屋の牧野作兵衛の家に伝来していた表千家不審庵写茶室竹陰軒を譲り受け、向島小梅の旧水戸藩徳川邸の南東隅にある江戸名所嬉森の老木のそばに移築し、待合、腰掛け広間を増築した茶室であった。大正五年一月九日箒庵が開きの茶会を行っている。ここは箒庵は藤井宗中を庵主としてまかせ、大正六年一月二三日に八田円斎（福祿堂<sup>\*62</sup>）、などに貸して茶会が催されている。箒庵は『万象録』のなかで、向島は潮風がきつく、伽藍石が傷んでしまうと不満を述べている。そのためか、嬉森庵での茶会の回数はそれほど多くは無かつた。<sup>\*63</sup>

四ツ谷町に続く一ツ木町の新居も、「懸崖高く赤坂一ツ木町通りに突出したるテーブルランドにして、三方広潤、赤坂離宮、清水谷公園、北白川、閑院両邸に対峙し、星ヶ岡山王の森に正面して、南方愛宕山を限り、半湾形に鬱蒼たる樹頭林頂を環視する景勝の地を占めた」好環境であつた。<sup>\*64</sup>大正六年、三度目の転居で、赤坂一ツ木町に移つた箒庵は、一ツ木町にかけて茶室を「一木庵」、披きの間を「伽藍洞」と命名した。がらんど、といえは中に何も無いことをいうが、伽藍堂といえは、伽藍神（寺院の伽藍の守護神<sup>\*65</sup>）を祭つてあるお堂となる。

かるかると世を渡る身は家のみか

頭の中もまた伽藍洞

と詠う箒庵は五七歳であつたが、追々老境に入り「憂き我れを寂しがらせよ閑古鳥」の閑寂の味を求める洒落臭い了簡が出てきた、と自分を評している。この箒庵が造つた広間「伽藍洞」は、箒庵のもう一つの蒐集物であつた

伽藍石を使つて作られた。<sup>\*67</sup>

箒庵が庭石に着目するようになったのは、三越呉服店大阪支店に勤めていた明治三一年頃からであった。奈良を中心に毎日曜日に古寺院巡りをし、古石を物色し、寺院から買い取つて、先に述べた麴町一番町に転居し、寸松庵が建てられた際に、それら蹲踞石、伽藍石、石塔を庭に配した。この庭が奈良の古石を東京に移した最初の庭で、東京の好事家達の噂の的となったという。箒庵が築庭の中で最も好んでいたのが石であり、古伽藍石<sup>\*68</sup>であった。前述の傳馬町の築庭の際の『万象録』の一節や『趣味ぶくろ』に「築庭趣味」と題して庭や石について熱心に語っているのにも見られるように、箒庵の「石買い」は並々ならないものであった。東大寺、法隆寺をはじめ一四、五もの寺を回つて蒐集した多数の伽藍石は、伽藍洞の庭前に敷き詰められた。「特に門塀を設けず、玄関即本門にして、正面高く古材に彫刻したる伽藍洞の扁額を掲げ、其両側に先年外の大伽藍石二個、朝鮮古塔一戸を排置したるは、頗る禪寺の宿坊に類する」<sup>\*69</sup>外観であつたという。

伽藍洞内に造られた茶室の「一木庵」という庵号は、一ツ木町という町名にかけているというが、大和国法隆寺の隠居寺の隠居法林寺の古塔柱を床柱として使用して「一木」に掛けて名付けられたものであつた。<sup>\*70</sup>

この一木庵開きの茶会は歳暮茶会を兼ね、一二月一日より毎日四客づつ十四回の茶会を催されている。<sup>\*71</sup>一木庵は家屋の新築に伴つて加藤正治の別邸に移築されることとなり、その後の箒庵の茶室は赤坂台町に造られた「有楽庵」という少庵と、熱海桃山別荘内に建てた「不言庵」という二畳敷き茶室となる。

茶室は、彼らのコレクションを見せる場でありながら、茶室がコレクションの延長上にあり、古いままでなくそれを活かす、リサイクルな使い方をしていた。また、茶室が「容れ物」であり、茶道具の展示空間と見ることが

できるのは明白であるが、箒庵の白紙庵は、茶室でありながらコレクションでもあった。箒庵にとってこの「白紙」には、単なる蒐集品の意味があっただけではなく、箒庵が物を書く人であったところに、この「白紙」蒐集の意味があり、「白紙庵」という茶室の意味が現れる。

箒庵が担当したラジオ講座「十二月茶の湯」<sup>\*72</sup>の講演録には、「茶室に此趣味を現はすと云ふことは、前条にも申し上げた通り、茶室を一枚の白紙と見做し、道具を以て夫れ夫れの茶題に応じた絵画を描くのであります<sup>\*73</sup>」とある。茶室という空間に現われる茶会は、その一瞬にしかない、仮設的なものである。箒庵は、多くの茶会に出席し、数寄を凝らした茶会を目にしてきた。また自らも茶会に意匠を凝らし、「自茶自賛」して茶会記にその様子を描いたが、面白い趣向のあるものにして、そうでないものにして、一度として同じ茶会はなかった。茶会記を書く箒庵にとって、あたかも紙の上で書いては消すという行為が繰り返されるように、茶室を「白紙」に見立て、「白紙庵」作りに着手したのである。

## 結 論

箒庵の茶会は彼の茶会記に見られるように、三井を中心とする実業家の社交場の一つとしての面、そして「豊かな陳列室」として、ものを介しての、多種多様な人々が寄り集まるサロンとしての面が見られる。箒庵が海を渡ってその目に焼き付けた、アメリカのワナメーカーの百貨店の商法とその商空間、イギリスの美術愛好家ボースの求めた「日本性」、パリ万国博覧会のエッフェル塔を中心とし、周辺に散らばる世界各国の展示会場を、その高みから見下ろすという、観るものを挑発するスペクタクルである。そういったものを実際に体感した近代の人びとが、

次に眼差しを向けることとなったのが、日本という「内側」であった。

その経験をどのように受け止め、どのような方向に生かしたかは、個人個人で違っているが、三井を中心とする実業家の面々が数寄者として書画什宝の蒐集に始まり、茶会という場を使い、それらのコレクションを披露する空間として、各々の趣向を、美学を見せることに熱を燃やすことになったのも、そこに起因する。

『万象録』の記述を見ると、実業界引退後の箒庵は決して茶の湯一辺倒の人ではなく、音曲、仕舞などにも茶の湯と同じように真剣に取り組んでいる。これは、他の数寄者にも共通する。そしてそれらは各々の茶会の中に取り込まれていった。数寄者の趣味の世界は、実業界におけるネットワークの延長にあるので、それゆえに茶の湯以外の世界での繋がりが強いこともまた、頭に入れておかねばならない。

ところで、箒庵をはじめとする数寄者たちは、茶の湯においていったいどのような存在であったのか。熊倉功夫によれば、箒庵は、数寄者の世代においては若い第三世代に属しており、茶の湯が復興し、数寄者の遊びとして益田鈍翁ら第二世代の間で流行した頃に、茶の湯の世界に引き込まれていった。それゆえに道具数寄の茶の湯という、近代数寄者の茶の湯の下地がある程度調っていたと言える。<sup>\*74</sup>

箒庵ら「第三世代」の数寄者たちの特徴は、その華やかさであった。大正時代の好景気のために、茶道具の価格も急騰したが、熊倉氏は箒庵世代の特徴について、箒庵たちの世代の数寄者は茶道具蒐集競争に遅れて出てきたため、かえって蒐集に貪欲であった点を挙げている。貪欲であったゆえに茶道具入札の際、高値で買いあさり、茶道具の価格が釣り上がったこと、そして大正期に入って旧大名家蔵品が道具界に流出したのと、箒庵の世代の活動開始時期がほぼ同時であったことなどがその理由として挙げられる。また、箒庵の同世代であった根津、小林らが蒐

集したコレクションは、個人美術館として残される先駆となった。<sup>\*75</sup>

山口昌男は「アマチュア」<sup>\*76</sup>の持つ異人的な力について論じているが、益田鈍翁、高橋箒庵ら近代数寄者たちにその「アマチュア」性が見られる。近代数寄者たちの茶の湯はフレキシブルで知的な遊戯性に富んだもので、長い時間をかけて出き上がってしまった茶道具の価値や定式に風穴を開ける。「異人」だからこそできる、自由さに乗った茶の湯であった。

高橋義雄は、昭和十二年十二月十二日、七七歳の生涯を閉じる。茶会記はその一月前まで執筆していた。高橋の蒐集した茶道具は美術館という形で残されず、散逸し、茶室は震災、戦災で無くなった。戦災にあった白紙庵であるが、戦後焼け残った茶庭をそのまま引き継いだ人物がいる。懐石料理人の石川辰雄氏である。ここでは何が遺され、そして残った場所に遅れてやってきた石川氏がどのような場を作り上げていったのか、それらも大いに関心のあるところであるが、それはまた別の機会に述べたい。

山口昌男が「喫茶の文化吸収力」という言葉で、近代数寄者の茶の湯を言い表したように、茶室はさまざまなのを飲み込んでしまうブラックホールのような穴であり、色々な物が詰まった「幕の内弁当」のような空間である。<sup>\*77</sup>そこに人々が惹きつけられていく様は非常に興味深い。また、展示空間と喫茶空間が一つである茶室という空間そのものは、大変有機的な、「生きられている」空間である。<sup>\*78</sup>

以上、本論において、高橋義雄という人物の蒐集に焦点をあてて近代茶の湯を見てきたが、近代史、経済史、茶道史、精神史、美術史、あるいは建築史などあらゆる方面から論じるべき視角はなお多く残っている。特に箒庵の新聞記者、事業家としての一面が、箒庵の茶の湯を形成する上で大きく影響している。また、茶会に呼ばれあちこ

ちへ足を伸ばし、ものを集めるために人づてに行脚する箒庵の、旅の人としての面もまた見逃すことはできない。これらの近代数寄者の茶の湯が、熊倉氏が指摘するように、後の柳宗悦の「民芸運動」へとつながっていく大きな美術史としてのうねりの一つであるという認識を意識し、以後さらに分析を深めていきたい。<sup>\*79</sup> 箒庵が試みたように、時間と空間を閉じ込めたような、「浮き立つようなもの」を研究の諸分野において大いに表現された山口昌男先生に遠く及ばぬことを自覚しつつ、筆者なりに今後それをいかに表現するかを、己の課題として見つめていきたい。

恩師、山口昌男先生に捧げる

#### 註

- \*1 数寄者とは、風流な人、特に茶道を好む人、茶人をさす。
- \*2 熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、一九八〇年）
- \*3 熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』（河原書店、一九九七年）
- \*4 高橋義雄の執筆した茶会記は、高橋義雄『東都茶会記』（第一輯上・中・下、一九一四年／第二輯、一九一五年／第三輯上・下、一九一六年／第四輯上・下までは箒文社、第五輯上・下、一九一八年／第六輯、一九一九年／第七輯上・下、一九二〇年までは慶文堂書店発行）、高橋義雄『大正茶道記』（慶文堂書店、庚申、一九二二年・辛酉、一九二三年・壬戌、一九二三年・癸亥、一九二四年・申子、一九二五年・己丑、一九二六年・丙寅、一九二八年）、高橋義雄『昭和茶道記』（慶文堂書店、一九二九（国民新聞にて連載は一九二七〜一九三二年）年）がある。
- \*5 高橋義雄編『大正名器鑑』第一編、第九編、大正名器鑑編纂所、一九二一年（第一編）、一九二二年（第二編、第三編、第四編）、一九二三年（第五編）、一九二五年（第六編）、一九二六年（第七編、第八編、第

九編)

- \* 6 高橋義雄著、大濱徹也「ほか」校訂『万象録』第一巻〜八巻、(思文閣出版、一九八六年(第一巻、第二巻)、一九八七年(第三巻)、一九八八年(第四巻、第五巻)、一九八九年(第六巻)、一九九〇年(第七巻)、一九九一年(第八巻))
- \* 7 『近代数寄者の茶の湯』の冒頭において、熊倉氏は次のように述べている。「近代主義であったからといって、数寄者たちは西洋化を近代化とは考えていなかった。一方の足を伝統文化のなかに深くおろしていたのである。その点では驚くべき保守主義に徹していた。文化財の海外流出という危機を前にして、いかに日本の伝統文化を守るか、ということも彼らの美術収集の動機の一つであった。理屈とか義務とかという観念ではなく、感覚的に江戸音曲の世界、技芸の世界をはじめとする数寄に耽溺していた。この保守主義がなくては、日本の近代はおそろしく無味乾燥の歴史になっていただろう。ところが今、われわれの足元から、根こそぎ数寄の世界が消えつつある。数寄者達も体験しなかった新しい危機がせまっている。なぜ数寄の世界が消えるのか、このまま放置して良いのか、問われているのである。」(十〜一一頁)
- \* 8 『近代茶道史の研究』二〜四頁
- \* 9 クシシトフ・ポミアン著、吉田城・吉田典子訳『コレクション―趣味と好奇心の歴史人類学』(平凡社、一九九二年)二二二〜二二六頁
- \* 10 前掲書、二十二頁
- \* 11 二〇〇〇年五月一八日日本医事新報社ビルで行われた文化講座、楽講「Gakkow」(第三回)でクリステイヌ・ガース(グート)女史によるレクチャー「益田鈍翁とリサイクルの美学」において語られた。
- \* 12 前掲『コレクション―趣味と好奇心の歴史人類学』、二〇頁。
- \* 13 二〇〇一年日本記号学会「コレクションの記号学」においてクリステイヌ・ガース女史、山口昌男らが論じている。学会の内容は、日本記号学会編『コレクションの記号学』(記号学研究二一、東海大学出版会、二〇〇一年)一三四〜一三五頁
- \* 14 長井実『自叙益田孝翁伝』(中公文庫、一九八八年)三三二頁

- \* 15 『万象録』によると、中村作次郎の永田町邸宅に携わったのは大正三年一月から。  
 \* 16 常盤屋主人の築庭に携わったのは大正二年秋。松本亀吉を採用している。  
 \* 17 高橋義雄『箒のあと』(上)(箒文社、一九三三年)四二二頁  
 \* 18 高橋義雄『近世道具移動史』(慶文堂書店、一九二九年)一一一頁～一二六頁  
 \* 19 「寸松庵」の顛末は松田延夫『鈍翁をめぐる9人の数寄者たち』(里文出版、二〇〇三年)、『美術話題史―近代の数寄者たち』(読売新聞社、一九八六年)にも描かれている。  
 \* 20 『箒のあと』(上)三二三～三二五頁  
 \* 21 前掲書、三二三～三二五頁  
 \* 22 海外渡航から帰国した高橋義雄は職を探していた際に友人から井上馨を紹介され、三井に入行する。このうち井上を通じて益田孝らと茶のつながりを持つようになる。  
 \* 23 寸松庵色紙入手のその後の顛末については小山玲子「茶室の文化吸収力 高橋箒庵の茶の湯」二〇〇二年札幌大学大学院文化科学研究科修士論文参照。  
 \* 24 高橋義雄『箒のあと』(上)(箒文社、一九三三年)四二二～四一五頁。「今度はヨリ狭い、侘び茶席をと思ひ、京都東山西翁院中に在る藤村庸軒好み、淀見の席と云へる、三畳敷きの茶室を模造した。此席は洞床で、二畳を客座、一畳を主人座として、其間に太鼓張二枚引を立て、炉は向切で、左手の窓を開けば、淀川の景色が手にとるやうに見ゆるので、此庵名を得たのである。」(『箒のあと』四一三頁)  
 \* 25 前掲書、四一三頁。  
 \* 26 前掲書、四二二～四一五頁  
 \* 27 前掲書、四二二～四一五頁  
 \* 28 高橋義雄著、大濱徹也「ほか」校訂『万象録』第一卷(思文閣出版、一九八六年)二七頁  
 \* 29 前掲書、七五頁。  
 \* 30 『万象録』第一卷、二四二頁。  
 \* 31 『万象録』によると、この後に箒庵は八木岡春山から書画を習っている。



- \* 32 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記2』（淡交社、一九八八年）「自茶自賛（上）」五五〇～五五二頁「自茶自賛（中）」二五二～二五四頁「自茶自賛（下）」二五五～二五七頁
- \* 33 高橋義雄『箒のあと』（下）（箒文社、一九三三年）一四五～一四九頁
- \* 34 『東都茶会記1』『自茶自賛（上）」五五〇～五五二頁
- \* 35 反古（反故）書画などを書き損じた不用の紙。ほぐ。ほうご。転じて、役に立たない物事を指す。
- \* 36 『東都茶会記1』『自茶自賛（上）」五五〇～五五二頁
- \* 37 前掲書五五〇～五五二頁
- \* 38 巻物、掛物、書画帖、屏風、襖に紙や布を貼り、表装を職業とする人のこと。経師屋については武者小路穰「ものと人間の文化史一〇八・襖」（法政大学出版局、二〇〇二）にその仕事がどのようなものであったか詳述されている。
- \* 39 『万象録』第一巻、三〇七頁
- \* 40 末宗廣『茶道全集第四巻・茶道具（二）』（晃文社、一九四五年）四五頁によると、白紙の讚は他に、詩讚が、沢庵の「軽々白羽過芦花 是鶴耶鷗耶鷺 楮国乾坤象王背 普賢世界布銀砂」、江雪の「看々普賢銀世界」、藤村庸軒の「月夕？晨 能解我憂 霜髮雪鬢 歳年時白 無画無詩掲一行 不看青赤亦兼黒（赤黒兼青黄）」這風致凜仮乎冷 楮国乾坤雪又霜」、正員の「非花非月還非雪 玉板玲瓏是潔哉 無事之中忽生事 刻癖好肉白凱々」、歌讚が、大綱和尚の半切物で紙中を一条の瀧と見立て、右肩に讚した「すすしきはたくひも更に夏山の 峯より落つる音なしの瀧」がある。
- \* 41 千宗室監修『裏千家茶道教本―床と床かざり』（淡交社一九六六年）六一頁
- \* 42 末宗廣『茶道全集第四巻・茶道具（二）』（晃文社、一九四五年）四五頁
- \* 43 高橋義雄著、大濱徹也「ほか」校訂『万象録』第二巻、（思文閣出版、一九八六年）二三頁
- \* 44 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記1』（淡交社、一九八八年）「自茶自賛（中）」五五二～五五四頁
- \* 45 前掲書、「自茶自賛（中）」二五二～二五四頁

- \* 46 前掲書、「自茶自賛〈中〉」二五二～二五四頁
- \* 47 『万象録』第一卷、四五三頁
- \* 48 前掲書、四三九頁
- \* 49 前掲書、三一四～三一五頁、六月三日。
- \* 50 前掲書、四二六～四二七頁、十一月二十二日。
- \* 51 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『昭和茶道記2』（淡交社、二〇〇二年）『日本之茶道』『私と茶席』（昭和十一年一月号、通巻四九号）、四四八頁。『万象録』の大正三年四月十七日の記述によると、「素志與白雲同悠 眞情與青松共爽」の二句を賜わったとある。（『万象録』第二卷、七十九頁）
- \* 52 前掲書「自茶自賛〈上〉」五五〇～五五二頁「自茶自賛〈中〉」二五二～二五四頁「自茶自賛〈下〉」二五五～二五七頁
- \* 53 新年茶会は「御宸翰前の茶客」というタイトルで連載された。（『東都茶会記2』二〇三～二〇八頁）
- \* 54 『万象録』の白紙庵開きの茶会の参加者の記載は、三月八日、三井八郎次郎、加藤正義、朝吹英二、団琢磨、伊丹信太郎／三月九日、吉田丹左衛門、野崎廣太、常盤屋主人、山澄力蔵／三月一〇日、三井高保、三井守之助、有賀長文、川部宗無、梅沢安蔵／三月一日、馬越恭平、松原新之助、安井泉（松平直亮代理）、古筆了任／三月一二日、安田善次郎、青地幾次郎、竹内専之助、大久保北隠、栗山善四郎／三月一三日、近藤廉平、田中常德、池田成彬、益田英作、伊丹善蔵／三月一四日、平岡夫妻、山本姉、清元お若、丸嘉婦人／三月一五日、石黒忠憲、下条正雄、田中親美、平田久、中村作次郎／三月一六日、益田孝、藤田平太郎、大口鯛二、奥村青山、古筆了任 となっている。
- \* 55 『万象録』第一卷、一三三二頁、二月八日。
- \* 56 他日の「白紙庵」における茶会参加者については前掲修士論文の『万象録』をもとに作成した茶会参加者の表を参照。
- \* 57 茶会に出席する人びとについては興味がつかない。茶会記のタイトルが「東都」から年号に変わったように、箒庵は東京以外の地域の茶人との交流も深かった。例えば、関西、金沢といった、東都以外の人々とのつな

- がりも、箒庵は大切にしており、井上馨とともに茶会、茶道具拝見の旅に出ることもしばしばであった。
- \* 58 『近代茶道の研究』(一九三〇―一九八頁)によると、一世代目は天保年間(一九三〇年―四三年)に生まれた世代で井上馨(世外)・安田善次郎(松翁)・平瀬亀之輔(露香)など。二世代目は弘化生れ(一九四四年以降)で茶道界をリードした人々。益田鈍翁・無為庵・馬越恭平(化生)・石黒忠憲(況翁)など、三世代目が箒庵、根津嘉一郎(青山)・団琢磨(狸山)・原富太郎(三溪)など、四世代目が戦後活躍した人々として小林一三(逸翁)・松永庵左衛門(耳庵)・畠山一清(即翁)などを挙げている。
- \* 59 山口昌男「経営者の精神史」『週刊ダイヤモンド』(日本経済新聞、二〇〇二年)一〇月二六日号一六六―一六七頁、十一月九日号一三六―一三七頁
- \* 60 高橋義雄『平岡吟舟と東明曲』(秋豊園出版部、一九三四年)五六―六七頁
- \* 61 『万象録』第二巻、五十頁
- \* 62 高橋箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記4』(淡交社、一九八九年)「福祿堂茶会」一三頁。茶客は高橋箒庵のほか、古筆了仲、山澄宗澄、中村好古堂、梅沢鶴叟が出席した。
- \* 63 『万象録』によると、大正七年六月六日から水戸徳川家から所蔵の茶道具を借り、初風炉の茶会を催している。向島の水戸徳川家の蔵は保存もままならないということで、大正七年一〇月二一日の水戸徳川家入札会が行われる。
- \* 64 『東都茶会記4』「伽藍洞一木庵」、三四四頁
- \* 65 寺院の伽藍の守護神は帝釈天・毘沙門天などインドの諸神から、日本の白山権現・三輪明神など寺院によって異なり、その種類は多い。
- \* 66 前掲書、「伽藍洞一木庵」、三四四頁
- \* 67 前掲書、三三八頁
- \* 68 がらんいし。廃寺の礎石を移して沓脱ぎや飛石としたものをいう。
- \* 69 前掲書、三三八頁
- \* 70 前掲書、三四一頁

- \*71 前掲書、「一木庵の会開席」、三五三頁
- \*72 東京中央放送局の婦人講座の企画番組。昭和八年二月から昭和九年三月まで放送された。
- \*73 高橋義雄『十二ヶ月の茶の湯』（秋豊園、一九四一年）、一二〇頁。箒庵は『趣味ぶくろ』（秋豊園出版部、一九三五年）においても同様のことを述べている。「本来茶室は白紙である、此白紙の上に書画器具を以て四季折々の吉凶慶弔其他雑多の趣味を現はし、其茶題に適する一幅の茶図を画き出すのが、茶の湯の趣味の骨子ではないか。」
- \*74 『近代茶道史の研究』、一九三〇—一九八頁
- \*75 前掲書、一九三〇—一九八頁
- \*76 山口昌男『山口昌男著作集1』「アマチュアの使命」（筑摩書房、二〇〇二年）、ここでは林達夫「アマチュアの領域」（『林達夫著作集4 批評の弁証法』（平凡社、一九七一年））を挙げて論じている。「…この様に、アマチュアが己の経験を地道に語り、専門家がそれを吸収しつつ、その知識を組織化して新しい概念にたかめるという作業は、十八世紀に理想的な形で見られるように、専門家の側によほどのフレキシビリティと、広範な得られた知識および知識の位置関係を人間に関する知識の中に位置づけていく体系性、あるいは思想的な包容性を前提としなければならないのである」（二五二頁）
- \*77 二〇〇二年秋の日、正午の山口ゼミが終わった後の話の最後に漏らした言葉。
- \*78 空間に関する文献としては、ガストン・バシユラール著・岩村行雄訳『空間の詩学』（思潮社、一九六九年）、オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』（せりか書房、一九七八年）、多木浩二著『生きられた家』（岩波現代文庫四五、岩波書店、二〇〇一年）などが挙げられる。ボルノウは、「体験され、また生きられていく空間」に關し「志向的空間は、知覚し、動いている人間の周りに構築されているので、それに応じてこの空間は、必然的に、人間その時その時の立つている場所、すなわちこの空間の中心に關連づけられている。人間が空間の中のどこにどのようにいるかという問いは、ここからは有意味に設定されることはまったくできない。なぜなら、人間はこの自分の空間の恒常的な中心であり、そして人間が移動すれば、諸物のむすびつきの体系としての空間はそれにつれてあちこち動くからである。とはいえやはり（中略）人間は空

\*  
79

間の中で移動し、その場合に空間を静止しているものとみてみると人が言う時、それには十分な意味があるのである。(中略) いまや空間は、そこに私がいる媒体の一種となり、そしてこのような媒体のもとで、ひとはじめて空間のなかにいるということについて有意味に論ずることができるのである。そのような媒体として空間は、ひとがいまや実際に空間にたいしてたんに空間のなかの諸物にたいしてのみでなく、特定の仕方でかわりをもつことができるかぎりで、疑似―物質的なものとなる。もちろんこの場合、そのことによって空間を対象化することはない(また空間をふたたび主観化することもない)。媒体として、空間は「対象」と「直感形式」との中間者なのであって、主観から独立の「入れ物」でもなければ、たんに主観的な構造物でもない。」(『人間と空間』二五七―二六〇頁)と述べるように、茶室も、詩的なものの媒体としての空間とみることができる。

『昭和茶道記2』の朝鮮旅行の記述(九五―一二四頁、一三五―一四三頁)によると、根津嘉一郎に誘われた箒庵は旅行に同伴し、柳宗悦に民芸運動のきっかけを与えた人物浅川伯教(二八八四―一九六四)と出会っている。また、『近代茶道史の研究』において、数寄者の死後の浅川伯教・柳宗悦らと茶について、戦時下における茶の湯の研究もなされている。